

氏名	千葉淳平
学位の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	甲文第137号(文部科学省への報告番号甲第468号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2013年3月2日
学位論文題目	“Smell Is One of My Sharper Senses”: Olfactory Imagination in William Faulkner's Works
論文審査委員	(主査) 教授 花岡 秀 (副査) 教授 新関 芳生 中 良子(京都産業大学教授)

論文内容の要旨

序

人間は日常生活において、自分自身に備わった感覚というものをそれほど意識することはない。感覚は生来のものであり、それがあまりにも当然のものとして存在するからである。しかし、フォークナーの数多くの作品にはそのような感覚が鮮明に、情緒豊かに描き出されているので、読者はそこに強い印象を受けることになる。

人間が何かを知覚する際、様々な感覚が連動し、互いに作用し合っている。これらの感覚の間に優劣関係を付けることはできないが、五感と呼ばれる諸感覚の中でも嗅覚は最も見過ごされがちで、評価の低いものとして見做されてきた事実を否定できない。この傾向は古代より多くの文化や社会において認められるものであり、フロイトやダーウィンなどの主張も嗅覚軽視を助長するものである。さらに、黒死病と悪臭との関連性も大きな要因と言えよう。

一方で、嗅覚は我々の心身の内に秘められたものを伝達する可能性を持つコミュニケーション・ツールの機能も有している。本論では、フォークナー作品に現れる嗅覚イメージに関心を置き、作品を解釈する。

I

『響きと怒り』において、ベンジーの匂いに対する過敏性は印象的である。特にキャディの「木のような匂い」は、彼にとって母を意味するものとして重要であるため、その匂いが消滅の危機にさらされるとき、彼は抗議の呻き声をあげる。だが、それにもかかわらずキャディは妊娠し、「もはや木の匂いはしない。」ベンジーの母としてのキャディは失われてしまい、残るのは、時の存在しないベンジーの意識の中で永久に繰り返される匂いの記憶だけである。

クウェンティンの場合、キャディのセクシュアリティがスイカズラの匂いと結びつき、そこにベンジーよりもさらに性的なオブセッションが強調される。それと同時にスイカズラの匂いは、死とも親和性を持つ。性と死は表裏一体であり、植物の花はその明白なメタファーである。とはいえ、スイカズラの匂いは、実はクウェンティンの脳裏にしか存在しない。そして、「記憶」と「創作」の類似性が認められる時、「記憶」と性質が類似している「匂い」もまた、彼の創作として捉えられるものとなる。彼が作り出した記憶は、現在の彼の行動を規定する力を持つ。それゆえに、キャディのセクシュアリティと水を連結した彼の意識におい

て、キャディを含意するスイカズラの匂いは彼を水へと引き寄せるのである。

嗅覚イメージが激減する第三章の語り手ジェイソンは、対応できない現実の流れに抵抗しようと言葉の壁を作り出している。しかし、彼がガソリンの匂いに耐えられないという事実は、彼の弱さと不能であることを明らかにする。さらに、彼が使用する樟脳は母と密接に結び付いており、その嗅覚を通して、進歩する時代の流れに取り残されるジェイソンの未熟な姿が浮き彫りとなる。

II

『死の床に横たわりて』の中で圧倒的な存在感を放つアディの死体は、強い腐敗臭を放つにもかかわらず、作品解釈において、その匂いは看過されがちである。そこで、この死臭に着目してみれば、生前のアディが求めていたアイデンティティの確立が皮肉なことにその匂いによってなされていることがわかる。彼女が不審の念を抱く言葉ではなく、匂いによって他者の認識を得ることができるのである。彼女に与えられた唯一のモノログでは語られない内的な真理が匂いによって語られていると言えよう。

また、その悪臭は一家のアイデンティティとしても機能し、彼らの旅を継続させる一助にもなっていると同時に、その匂いがなければすぐにも崩壊してしまうほどの互いの疎外感に触まれた、一家の危うさを示唆するものともなっている。

III

『サンクチュアリ』のポパイからは「黒い匂い」がするとホレスは語るが、その黒いものとは『ボヴァリー夫人』のエマの口から出てきたものであり、両者に共通するのは死病の原因としての悪臭である。身体から滲み出る体液は絶対的な離別としての死を連想させる。また、この匂いは身体的なものだけでなく、性的な墮落を含意し、悪徳の香りとしても機能する。

一方で、ポパイがこだわるフランス製化粧品、整髪剤の匂いから、彼の「黒さ」が人種的な問題であることが明らかとなる。白人であるはずのポパイの人種は作品中では明確に描かれておらず、その「黒さ」が繰り返し言及されている。彼の行動は自分の白人性を確立するための試みであるが、体臭に関するコンプレックスから生じる過度の化粧品の使用は逆に黒人性を強調するものである。そして、彼は白人を装う偽物であるため、白人社会より断罪されることとなる。

IV

「エミリーへのバラ」にて発生するホーマーの死臭に対する共同体の反応は、悪臭を忌避する社会規範の発露である。だが、エミリーにとってその死臭は性と生殖を意味する。また、彼女の部屋に充満する埃が剝離した皮膚組織から成っているとすれば、その匂いはホーマーの死体そのものの匂いと考えられよう。

『アブサロム、アブサロム！』のローザの体臭は、彼女の処女性を外へ漏洩している。それを嗅ぐクウェンティンはローザの語りを自分の記憶のように経験する。クウェンティンに吸い込まれたローザの体臭はクウェンティンの内で実体化することになる。

V

「熊」は一見するとウィルダネスと非ウィルダネスという単純な二項対立を内包しているようである。嗅覚イメージの観点から見てもこれは否めない。ただ、その分類においては人種や動物といった典型的な範疇は機能していない。重要なのは交雑性であり、これがウィルダネスの条件として浮かび上がる。生存競争を生き抜くには強靱な遺伝子を求めて交雑が求められるのである。

さらに、この見解を押し進め、ウィルダネスが交雑するのは非ウィルダネスということになる。この交雑に

よって、森林破壊が嘆かれる中、文明化を象徴する鉄道さえも飲み込んでより屈強なウィルダネスが現れる可能性の指摘が展開される。

結

嗅覚に関する本格的な研究はまだ歴史が浅いが、近年その数は内容とともに飛躍している。それに呼応するかのように、フォークナー研究においても嗅覚をテーマにしたものが見られるようになってきている。他の感覚に比べて嗅覚は感性や想像力を喚起するという点で、文学における重要性が認識され始めた。フォークナーが嗅覚イメージを多用するのは、嗅覚的想像力が様々な柵や境界線を乗り越えていく可能性を持つためだろう。

論文審査結果の要旨

千葉淳平氏の学位申請論文は、氏の本学博士課程前期課程および後期課程を通してのフォークナー研究、さらに、その後の本学研究員としての研究を発展させてまとめあげられたものである。序論、本論5章、結論から成る本論文は、現在のアメリカ小説に限らず、世界的にも計り知れぬ程の影響を与えている、きわめて重要な20世紀アメリカ作家、ウィリアム・フォークナー（William Faulkner）の、*The Sound and the Fury*, *Sanctuary*, *As I Lay Dying*, *Absalom, Absalom!* さらに“The Bear”や“A Rose for Emily”を取り上げ、これらの作品に描き出された「嗅覚」が提起するさまざまな問題を検証しようとするものである。

千葉氏の学位申請論文は、「フォークナー作品における、嗅覚が喚起する想像力」というタイトルの一部からも窺えるように、フォークナーの作品を、そこに描き出された「嗅覚」に焦点を据えることに、新たな角度から読み直すことを試みようとしたところに、その特質と意義が認められる。フォークナーの作品に限らず、そもそも文学作品を「嗅覚」という感覚に着目して考察しようとする研究がこれまでそれほど多くなされていないこともさることながら、作家の作品全体をひとつの視点から読み解き、その全体像に迫ろうという氏の姿勢と意気込みはきわめて興味深いと同時に評価に値するものである。

The Sound and the Fury を「木のような匂い」、「スイカズラの匂い」、さらに「ガソリンの匂い」、「樟脳の匂い」に着目することによって、ベンジー、クウェンティン、ジェイソンの三人の語り手のオブセッションを浮かび上がらせる第1章の手際のよさは注目に値する。第2章の、*As I Lay Dying* の分析にあたっては、アディの死体が放つ強い腐敗臭を取り上げ、それが生前のアディが求めていたアイデンティティの確立を可能にしているだけでなく、バンドレン一家にアイデンティティを付与するものとして機能しているという指摘は斬新で刺激的であるといえよう。*Sanctuary* に登場するポパイを、彼が常用していた整髪剤の匂いから読み解こうとした第3章は、これまでの *Sanctuary* 論に新たな光を投げかけるものである。第4章の、“A Rose for Emily”の考察では、劇的な物語の最後の場面で執拗に描かれる「埃」に、「嗅覚」という観点からの新たな解釈を試み、*Absalom, Absalom!* の考察でも、ローザのクウェンティンに対する影響力を、彼女の体臭という観点から解き明かそうとしている点は新鮮である。第5章では、“The Bear”に認められる嗅覚に関するイメージから、破壊され、後退して行くウィルダネス（荒野）の究極の姿を予想するという大胆な考察を展開しているが、このような考察もこれまで言及されることのなかった意欲的なものといえよう。

もっとも本論に問題がないわけではない。たとえば、*Sanctuary* の考察では、『ボヴァリー夫人』のエマの口から吐き出される「黒いもの」を援用して、ポパイの「匂い」の分析を始めるが、その妥当性は説得力に欠ける点があろう。“A Rose for Emily”と *Absalom, Absalom!* の考察では、テキストそのものの詳細なさらなる分析が求められよう。また、“The Bear”の分析にあたって、「ウィルダネス」と「非ウィルダネス」という二項対立的な視点から考察をはじめ、「嗅覚イメージ」を強力な武器として「ウィルダネス」の行く末

を論じようとするが、「非ウィルダネス」の概念定義が曖昧で、論旨の危うさは否定できない。また英語表現に関しても不適切な箇所が散見される。しかし、これらの問題点にもかかわらず、本論は博士学位請求論文としての価値を十分に備えるものである。「匂い」というきわめて独創的な視点からフォークナーの文学の核心に迫ろうとする考察は、フォークナー研究に新たな次元を開く可能性を秘めたものである。

提出論文の審査委員3名は、論文の審査ならびに2012年1月29日に実施した口頭試問の結果から、千葉淳平氏が本論文によって博士（文学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告致します。